

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2010

課題番号：20520156

研究課題名（和文）小川未明童話全集未収録作品の収集と研究

研究課題名（英文）Collection and research of works which are not recorded on "Ogawa Mimei fairy tale complete works"

研究代表者

小埜 裕二（ONO YUJI）

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：00204256

研究成果の概要（和文）：1、全集未収録童話の収集。雑誌が存在しない 5 編を除き、457 編すべてを収集した。2、初出誌紙不明童話の調査。226 編（初出不明 515 編のうち）を明らかにした。3、未明童話の再検討。研究会及びシンポジウムを開き、成果を『解説小川未明童話集 45』（北越出版）、『新選小川未明秀作童話集 ヒトリボッチノ少年』（蒼丘書林）にまとめた。4、全集未収録作品及び書誌情報の公開。『定本小川未明童話全集 新資料 457』及び『小川未明童話書誌』の公開を本年度中に行う。

研究成果の概要（英文）：1:About collection of the fairy tale which is not recorded on complete works, all 457 pieces were collected except for five pieces in which magazines do not exist. 2:About investigation of the fairy tale which was unknown as for the published years, 226 pieces were clarified. 3: About reexamination of Ogawa Mimei fairy tale, many study groups and symposium were opened and the result was published to "Description, Collection of Ogawa Mimei fairy tales 45" (Hokuetsu publication), etc. 4: About public presentation of works which is not contained in complete works, and of bibliographic information, publication of "Fairy tale complete-works new data 457" and "Ogawa Mimei fairy tale bibliography" are performed during the current fiscal year.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	400,000	120,000	520,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学

キーワード：近・現代文学、童話、小川未明

1. 研究開始当初の背景

（1）新潟県上越市に生まれた小川未明は、地元の人々には郷土作家として身近な作家である。だが〈日本のアンデルセン〉と高い評価を得た戦前の未明受容と異なり、戦後は

必ずしも高い評価を得てきたわけではない。それには幾つか理由がある。戦争協力者であったことへの批判、戦後の児童文学作家達から古い童話作家の代表として攻撃の的になったこと、暗い子供像から明るい子供像へと

移りかわった戦後の子供像に合致しなかったこと等が理由にあげられる。

研究開始当初、すでにいくらか再評価の機運があったとはいえ、『国文学年鑑』（国文学論文目録データベース）で未明関連の論文発表数を見ても、研究が十分行われているとはいえない状況にあった。

未明の地元である上越教育大学で文学教育・研究にたずさわってきた私は、宮沢賢治の童話研究を進めるかたわら、未明文学についても研究を行ってきた。賢治全集が草稿段階からの生成過程をたどる稠密なものであるのに対し、『定本小川未明童話全集』（全16巻 講談社 昭和52 以下「全集」と略す）は童話作品を全16巻に編集したもののだが、全童話の約3割が未収録となっていた。また、初出誌紙が不明の童話が約4割あった。

（2）小川未明は明治・大正・昭和と作品を書き続け、作家活動期間は50年を超える。未明は、日本近代の各時代を、戦後を含め、作家として活躍しつづけた稀有の作家であった。童話に限ってもその作品数は1200を越える。明治の終わりに童話集『赤い船』を刊行し、大正期には童話作家の中心的存在となった。大正末年に童話宣言を行い、以後、童話に専念する未明は、昭和初年代には生活童話を中心に書き、続いて戦争童話を書き、戦後はヒューマニズム童話を書くにいたる。

未明の作品テーマは時代の変化に即応し、つねに時代を生きる人々に向けて発せられた。未明童話の変化は、未明評価を下げる一因となったが、それは、各時代状況において人間性を守るための戦いの結果であった。

これまで、各時代の読者に作品を提供しつづけた未明のような作家を正当に評価する研究は少なかった。文学研究が有名作家の研究に終始し、文学の価値基準を美的機能に置いてきたためである。しかし近年、その反省が起こってきた。文学作品がもつ社会的機能も、文学の価値を考えるとときに重要であると理解されてきた。

未明童話を再評価するといったとき、未明の文学者としての生き方自体が近代の人間の生き方として重要なものを含んでいる。そのことを含め、時代状況に即応し生産された童話作品が読者に与えた社会的影響についても考えていく必要がある。

その意味でも、全集未収録の作品が多いこと、発表雑誌未詳の作品が多いことは、未明文学の再評価に支障をきたす大きな問題となっていた。

2. 研究の目的

（1）未明文学の再評価や研究を阻害してきたものが、未明童話に関する基礎資料の欠如であることをふまえ、全集未収録童話を収集

し、さらに初出誌紙の調査を行うことを最初の研究の目的とし、収集・調査のうえで、未明童話の全容を把握し、未明童話の特質に関する再検討を加えることにした。

さらに本研究では、収集した全集未収録作品および初出誌紙調査に基づく書誌情報、および未明童話に関する再検討の結果を広く市民に伝えることが重要であると考えた。

以上をまとめると、研究の目的は以下の4点となる。

- A) 全集未収録作品の収集
- B) 初出誌紙等の書誌に関する調査
- C) 全集未収録作品をふくめた未明童話の再検討
- D) 全集未収録作品および書誌情報の公開

3. 研究の方法

（1）全集未収録作品の収集については、国会図書館及び国際子ども図書館、大阪府立国際児童文学館、小川未明文学館等が所蔵する未明童話集、初出誌紙を通じて行う。全集第14巻の「童話作品一覧」は、「初出誌・紙の判明している作品」と「初出誌・紙のわからない作品」の2群に分かれ、どの作品が全集に収録されているかが示されている。この情報をもとに、全集未収録作品の収集を行う。童話集所収の作品については、単行本を入手できれば収集は容易である。単行本未収録の童話については、初出誌紙が判明しているものであれば、初出誌紙から童話の本文を収集する。

（2）未明童話の初出誌紙不明作品の出典調査については、国会図書館及び国際子ども図書館、大阪府立国際児童文学館等が所蔵する逐次刊行物を、国際子ども図書館が提供する書誌検索システムを参照しつつ、現地調査を行う。「初出誌・紙のわからない作品」は、未明童話全体の約4割を占める。全集編集には未明の遺族も加わっているから、遺族の許に未明童話の書誌関係の資料がないことが推測される。そのためこの作業は、国立国会図書館、国際子ども図書館、大阪府立国際児童文学館等の逐次刊行物を、ひとつひとつ実際に閲覧して確認していく。

（3）全集未収録作品をふくめた未明童話の再検討については、先行研究をふまえ、全集未収録作品の特徴を、全集収録作品との質的な違いを念頭において考察していく。具体的には、童話集未収録の作品を視野に入れたうえで、当時、刊行された未明の童話集（ここには全集収録童話も未収録童話も混在している）を精読することを通じて、未明童話の全体像をあらためて検討していく。この作業を有効なものにするために、小川未明童話研究会を立ち上げ、定期的に童話集の特徴につ

いて市民とともにの考えを深めていくことにする。また、研究会の最後には、「小川未明童話の再検討」というテーマでシンポジウムを行う。

(4) 全集未収録作品の公開については、文字化をしたうえで、『定本小川未明童話全集新資料』として公刊する。2011年には、未明没後50年を迎える。全集未収録作品については、将来、小川未明文学館のホームページを通して公開する。書誌情報については、『小川未明童話書誌』として公刊する。また、研究代表者のホームページに、書誌情報の速報を即時掲載していく。また、研究成果を広く市民に還元するために、研究最終年度には、上越市において未明童話に関するシンポジウムを開催する(前掲)。

4. 研究成果

(1) 研究年度別の研究成果概観。

平成20年度には、全集未収録作品の収集をほぼ終了した。出典調査については、約150作品について初出誌・紙を明らかにすることができた。全集未収録作品をふくめた未明童話の再検討についても一部実施した。全集未収録作品のうちには、戦争中に発表された未明童話や小説に近い内容の童話が数多くあることが明らかになった。後者については文学性の高い作品が数多く見られることが分かった。また、収集した童話の電子ファイル化を行った。電子ファイル化したものの中には、画像状態のわるいものもあり、トリミング作業を行い、公開テキストとして見やすいものを作成することに努めた(注:電子ファイルのトリミング作業には限界があり、後に全集未収録童話すべてを文字化して提供することに計画を変更する。)

平成21年度には、昨年度に収集できなかった童話の収集に努めた。収集した本文については電子ファイル化し、トリミング作業を行った。初出誌紙等不明作品の調査は、調査の結果、約100作品の出典を新たに明らかにすることができた。新資料も数多く発掘することができた。例えば、台湾の日本語新聞や宗教関係の新聞に未明が数多く童話を発表していたことが判明した。メディアと未明の関わりについての調査が今後必要であることが分かった。全集未収録作品をふくめた未明童話の再検討は、未明の童話集(刊行順)の読解と考察を行い、さらに11月からは小川未明童話研究会を立ち上げ、月に1回の研究会を行った。未明童話の変遷とその特質をわずかであるが明らかにすることができた。また全集未収録作品の多い初期童話に関する考察から、後の未明童話の特質がより明確に把握することができた。

平成22年度には、全集未収録の童話457編の公開について、小川未明の著作権以外に、

版許の著作権や挿絵画家の著作権がからむために(画像のノイズが大きいことも)、電子ファイルしたテキストの公開を断念し、文字化して提供することにした。雑誌そのものが散逸してしまって収集不能の童話も、5編あった。全集出典不明作品の調査は、調査の結果、平成22年までに226編(初出不明515編のうち)の初出誌紙を明らかにした。なお上記のほか、別に新資料を84編明らかにした。未明童話の再検討は、未明童話集の読解と考察を、小川未明童話研究会等の活動を通して行い、未明童話の変遷とその特質を明らかにした。

平成23年度(注:東日本大震災の影響により、研究の一部を平成23年度に繰り延べた。)には、「没後50年記念シンポジウム 小川未明童話の再検討」(パネラーは杉みき子、小川英晴、栗原敦、宮川健郎の4氏、司会是小埜裕二)を平成23年7月3日(日)に実施した。会場は、上越教育大学。参加者は約80名。市民に対し、研究の目的や成果を還元することができた。

シンポジウムの特別講演とパネル・ディスカッションのテーマは以下のとおりである。特別講演:「未明童話と〈希望〉」(杉みき子)、「小川未明における詩精神」(小川英晴)、「未明と賢治—語り・感覚・異空間—」(栗原敦)、「未明の消息—この50年の児童文学と小川未明—」(宮川健郎)。

パネル・ディスカッションテーマ「没後50年小川未明童話の再検討」

(2) 項目別研究成果概観。

① 全集未収録童話については、457編を収集した。これ以外に5編は、雑誌そのものが散逸してしまい、現時点で収集不可能であるが、ほぼ所期の目的を果たすことができたと考える。未明童話には、どれを童話とし、どれを小説とするか判断のむづかしい作品もある。今回、取捨選択し、457編を文字化した。将来的には、ウェブ上に公開したいと考えているが、本年度中に『小川未明童話全集新資料457』として公刊する予定である。

全集に収められなかった作品の多くは、作品の質が全集収録作品に比べ、劣るものではない。未明童話について、また未明という作家について考えるうえで、きわめて重要な作品が、これまで全集に収められなかったために注目されずに埋もれてきた。

小説集に収められていた習作時期の未明童話や、戦争期に書かれたため全集には収められなかった童話、外国の日本語新聞に発表された童話等、全集未収録童話の意義が高いことが明らかになった。

② 初出誌紙不明の童話の調査については、226編が明らかになった(注:平成20年度、平成21年度の調査において、約150編、約

100 編の初出誌紙を明らかにしたとあるのは、新資料 84 編を含む数である)。現時点でまだ 289 編の童話について、初出誌紙が判明していない。この調査については、今後も継続して続けていく。

調査を通じて、未明が多種多様のメディアに童話を掲載していることが分った。童話雑誌以外に、学年別学習雑誌、幼年雑誌、商品の PR 雑誌、政治関係の雑誌、婦人雑誌、地方新聞、外国の日本語新聞、宗教関係の新聞、その他さまざまである。それらの雑誌や新聞の性格に見合った内容の童話を、未明は書きわけていたようである。童話宣言以後の昭和期、未明はプロの童話作家として、童話を自在に書き分けていることが分かった。

③ 童話の再検討については、小川未明童話研究会の活動成果に負うところが大きい。平成 21 年 11 月から毎月 1 回、計 17 回の研究会を市民約 20 名とともにに行った。講読した童話集は、『赤い船』『赤い蠟燭と人魚』『小さな草と草原』『ある夜の星たち』『青空の下の原っぱ』『雪原の少年』『コドモエバナシ』『犬と犬と人の話』『日本の子供』『夜の進軍喇叭』『亀の子と人形』『りっぱな心』『みどり色の時計』『うずめられた鏡』その他、新資料童話集である。研究会の講師には、一部、近隣の文学研究者を招いた。堀竜一氏、渡部恒美氏、敵大漢氏、青木彬樹氏、岡田浩行氏が講師となった。

研究成果を、小笠裕二編著『解説小川未明童話集 45』(北越出版、平成 24 年 3 月)にまとめた。上記の研究会講師を含め、総勢 38 名に、主な小川未明童話集 45 冊について、その特徴をそれぞれまとめた本である。この本のあとがき「未明童話の新しい扉をひらく」で、研究代表者である筆者は、次のように書いている。

未明の童話集には、代表名作選集といった性格のものも数多くあるが、その時代の未明の主張をよく表したのものもある。解説の対象としたのは、後者である。童話集の解説を単体で書くことで、童話集が書かれたその時代の共時的な傾向を見ることができる。またそれら童話集の解説を串刺しに眺めると、通史的な未明童話の推移が見えてくる。一方、童話集の中の代表作周辺に目をやると、あまり目立たないが、いつの時代にも変わらず描かれてきた未明の抒情の美学といってよい詩的童話を見ることができる。

未明童話の業績のひとつに幼年向け童話があるが、とりわけ初期にかかれたカタカナ童話には、未明のそうした詩的精神が表れたものが多い。『小川未明コドモエバナシ』に書かれたような内容が、時代の流れとともに教訓的な童話に変わっていつ

たのは残念である。しかし、未明の詩的精神は、一貫して流れていた。時代が必要とするものを提供しようとする童話のアクチュアリティを未明は求めた。それはその時代を生きる子供や大人にとって大事なメッセージであった。そうした童話のアクチュアリティは未明童話の特徴だが、一方で、未明には終生かわらぬ詩的な抒情性への志向があった。

童話集単位で童話を読んでいくなかで、童話宣言をした直後の未明童話にすぐれた童話が多いことも分かった。ちょうど未明が丸善株式会社から『未明童話集』1～5 を刊行していた時期に書いていた童話である。大正期の後半は毎年一冊以上の新刊童話集を刊行していた未明であるが、昭和期に入ると、未明童話の名を冠した童話集の刊行がしばらくなくなる。その間に出ていたのが『未明童話集』1～5 であった。各巻五〇編近い童話が収められた童話集で、一巻から三巻までは大正期に書かれた童話をまとめたものだが、四巻と五巻は昭和に入ってから雑誌に掲載された童話を収めた新しい童話集である。『未明童話集』という名で刊行されたため見過ごされてきたが、四巻と五巻の童話は童話宣言以後の未明の思いが、これまでの未明のスキルの高さとロマン主義と社会主義の融合のなかで語られ、すぐれたものが多い。

上記の本のほかに、全集未収録童話から秀作を選び、かつ、これまで大正期の幻想的な童話を中心に読まれてきた未明童話の印象をあらためるために、昭和期の童話の中心に未明の新しい魅力を伝える童話集を刊行する準備を進めている。タイトルは『新選小川未明秀作童話集 50 ヒトリボッチノ少年』(蒼丘書林、平成 24 年 7 月刊行)である。この本は、未明童話の再検討の結果を、新しい童話集のかたちで提示するものである。巻末には、「昭和期の未明童話」という解説をつけた。そこで筆者は、次のように書いている。

前半期に優れた代表作があるように、後半期の中にも優れた童話を見出すことができる。本書が目指したのは、後半期の童話からそうした作品を選び抜くことであった。『定本小川未明童話全集』(講談社)に収められた童話は約七五〇編あるが、全集未収録童話四五〇編を含めた一二〇〇編のなかから、未明童話の新しい相貌をあらわすものとして、五〇編の童話を選び出した(うち六編は大正期に発表された童話、一六編は全集未収録童話である)。何よりすぐれた完成度をもった童話であること

を条件に、前半期にはない新しい内容を備えたもの、未明童話の変容について何らかのヒントを与えるものを主な選択の観点とした。

「ヒトリボッチノ少年」(初出不詳、『カタカナ童話集』昭和一四年一〇月)というカタカナ童話の題名を本書の表題とした。

〈ヒトリボッチ〉の価値について述べたこの童話は、現代の少子化の現状と重なるところがあるが、未明の孤独が北国のきびしい自然の中で生まれ、自然をおそれ、自然を見つめるにいたる経緯は、現代の孤独が都市の中で生まれ、自然と向き合うことなく、孤立を深めていく経緯とは対照的である。未明童話の原点は、北国の自然から生まれた〈ヒトリボッチ〉にあるといつてよい。そこから〈動の童話〉と〈静の童話〉の二つの花が咲いた。二つの花は、別々のものではない。

④ 全集未収録童話の公開については、前述したので、ここでは書誌情報の公開について記す。研究成果は、『小川未明童話書誌』(人物書誌大系シリーズ 日外アソシエーツ、紀伊国屋書店、平成 24 年度中刊行予定)により公開する。初出誌紙情報、収録童話集状況、各作品のあらすじ、索引、研究文献書誌、年譜、等を本書に収める予定である。研究開始年度より、童話書誌については、DVD-ROM 等の電子メディアを通じて公開したいと考え、その完成を目指してきた。未明童話約 1200 編について、短いあらすじを用意してあるので、その点でも、今後の研究に資すると考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 4 件)

小埜裕二(編著・解説)、北越出版、『解説小川未明童話集 45』、平成 24 年 3 月(2012)、334 頁。

小埜裕二(編・解説)、蒼丘書林、『新選小川未明秀作童話集ヒトリボッチノ少年』、平成 24 年 7 月(2012)刊行予定、300 頁。

小埜裕二(編・解説)、西田印刷、『小川未明童話全集 新資料 457』、平成 24 年 9 月(2012)刊行予定、全 3 冊、各冊 420 頁。

小埜裕二(編・解説)、紀伊国屋書店・日外アソシエーツ、『小川未明童話書誌』、平成 24 年 12 月(2012)刊行予定、400 頁。

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://sun-cc.juen.ac.jp8080/~yuji/> (出典調査結果の速報を載せている。)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小埜 裕二 (ONO YUJI)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：00204256

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし